

※東日本大震災で大きな被害を受けた波板海岸。駐車場には津波到達点の石碑が佇む。被災沿岸地域の真の復興と安寧を祈念し表紙の写真を選択した。



視察報告書

2023 年

改革大船渡

会 長 船砥英久

幹事長 金子正勝

平山 仁

船野 章

視察目的等

【日 時】 令和 5 年 3 月 28 日(火曜日)～3 月 29 日(水曜日)

【視察場所】 震災伝承ネットワーク岩手県内第三分類施設他

【視察目的】

東日本大震災 10 周年を節目と捉え、県内被災自治体の復興の様子や防災学習施設等の機能について視察を企画していたが、新型コロナウイルス感染症の影響により視察の延期を余儀なくされていた。今般、新型コロナウイルス感染症にかかるマスクの自由化など緩和に向けた環境が整いつつあることや当市の震災追悼施設も提案されたことから、改めて被災沿岸自治体の視察を計画したものである。

視察目的は、各自治体で整備された震災伝承施設や震災遺構を巡ることで、各自治体の復興状況や伝承を肌で感じることである。

その為に、3.11 伝承ロードを軸に各自治体の施設を伺うこととした。

加えて、当市で整備を行った防災観光交流センターと他自治体類似施設との比較や防災学習館の比較、追悼施設の比較を行いたいと考えている。

また、ほとんどの施設が復興交付金を主財源として建設された震災を機会とした建設されたものであることから、運営費や委託先、入館者等も比較したい。

さらに、今回の視察を通じて、当市の防災学習ネットワークがどのように機能するべきか、機能を発揮するべきかを考え、会派として議論を深めたい。



当会派恒例の出発前のミーティング及び行程の確認。

撮影 平山仁

視察日時&行程

日時	視察場所
3月28日 火曜日	市役所出発
	いのちをつなぐ未来館 / 釜石祈りのパーク
	宮古市市民交流センター(防災プラザ)
	たろう潮里ステーション(防災体験館見学)
	震災遺構たろう観光ホテル
	田老防潮堤
	野田村復興展示室
	久慈グランドホテル 宿泊
3月29日 水曜日	情報交流センターYOMUNOSU
	山田町まちなか交流センター
	大槌町文化交流センター通称:おしゃっち
	市役所にて反省会

視察は、3. 11 伝承ロードを辿る行程で計画した。

岩手県津波伝承施設(大船渡市・陸前高田市・遠野市除く)

津波遺構たろう観光ホテル	0193-68-9091	岩手県宮古市田老字野原80番地1	○
たろう潮里ステーション	0193-65-7506	岩手県宮古市田老二丁目5番1号	○
宮古市市民交流センター 防災プラザ	0193-63-4166	岩手県宮古市宮町一丁目1番30号	○
田老防潮堤	0193-65-0031	岩手県宮古市田老字川向 地内	○
震災メモリアルパーク中の浜	0193-62-3912	岩手県宮古市崎山第3地割123番地	×
久慈市地下水族科学館もぐらんぴあ	0194-75-3551	岩手県久慈市侍浜町麦生町第1地割43番地7	×
釜石祈りのパーク	0193-27-5666	岩手県釜石市鵜住居町四丁目地内	○
いのちをつなぐ未来館	0193-27-5666	岩手県釜石市鵜住居町四丁目901番2	○
大槌町文化交流センター おしゃっち	0193-27-5181	岩手県上閉伊郡大槌町末広町1番15号	○
震災遺構明戸海岸防波堤	0194-34-2111	岩手県下閉伊郡田野畑村明戸海岸	×
島越ふれあい公園	0194-34-2111	岩手県下閉伊郡田野畑村松前沢1-4、1-52	×
羅賀ふれあい公園	0194-34-2111	岩手県下閉伊郡田野畑村羅賀27-2	×
野田村復興展示室	0194-78-2963	岩手県九戸郡野田村大字野田17-107	○
山田町まちなか交流センター	0193-82-3111	岩手県下閉伊郡山田町川向町6-24	○

○印は今回視察を行った施設

「津波伝承施設」とは、災害の教訓や防災に貢献できる施設等で構成され、八戸市から福島県内に渡り数多くの施設が登録されている。

視察内容

いのちをつなぐ未来館 / 釜石祈りのパーク

鵜住居駅に隣接し、複数の施設が集約している「うのすまい・トモス」内に整備されている。



1



2



3

写真 1 いのちをつなぐ未来館等の施設は、簡素なつくりで驚いた。費用を抑えながらも使い勝手のよい施設であることが分かる。**写真 2** 各施設がまとまりをもって配置されているのが分かる。当市の分散型防災学習ネットワークとは対比的なつくりと言える。**写真 3** 関係する記事を拡大し見やすいよう配置している。この小さな心遣いが集客につながるものと実感した。

次のページへ続く



うのすまい小学校の避難の様子を時間と距離で示していることから、直ぐに避難行動をとらなければならないとのメッセージが伝わりやすい。

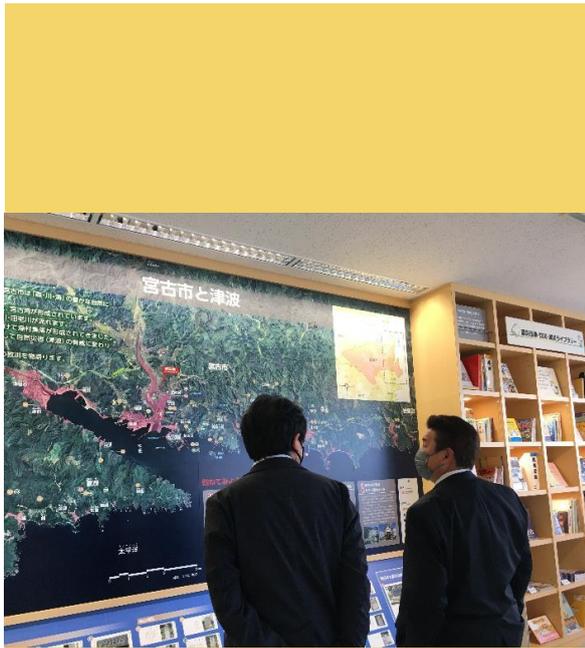


○順路に沿って学習出来るよう工夫されており、見ごたえもあってクオリティも高い。一方、大きなスクリーン等はなく、語り部等により臨場感ある学習が出来るよう工夫されている。

○学校ごとの取組の様子や東日本大震災関連の図書が集約され、ひとつの施設で理解が深まるよう設計されている。また、祈りのパークも隣接され、まとまりのある施設となっている。

○新型コロナウイルス感染症の時期に於いても来館者数は変わらないと伺ったことから、PR 方法を訪ねたところ、『特別なことは行っていない』との答えが返ってきた。施設の立地、集約性、クオリティの相乗効果であると考え。 (学習旅行者が多いと伺ったが、施設の集約化によるものではないか)

■ 宮古市市民交流センター / 防災プラザ



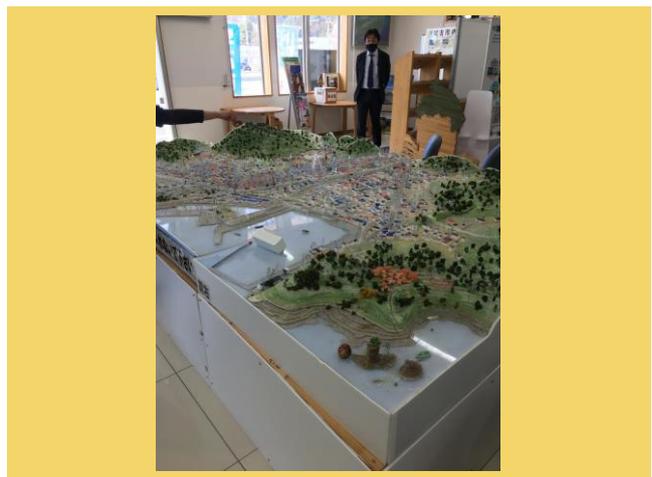
市民交流センターは市役所に併設されている施設であり、その一角に防災プラザが備えられている。

展示は見やすく工夫され、過去の津波に関する学習も出来るようになっている。

また、デスク利用コーナー（100 円/時）やフリースペースも充実しており、駅と直結していることから多くの学生や市民が訪れていることに驚いた。

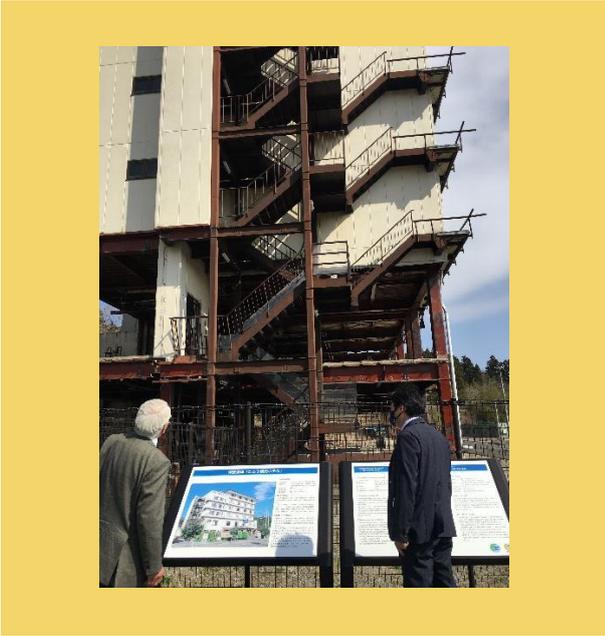
1 階には、こどもに関するワンストップデスクが配置されるなど利用者目線の施設と言える。また、中心部に位置していることから徒歩・電車・自動車・路線バス等、複数の移動手段による見学が可能。

・たろう防災清里ステーション



重点道の駅内の整備された「たろう清里ステーション」。管理は観光協会が行い、スタッフの方からお声がけいただき、展示物の説明と台風 19 号による被害について伺った。このジオラマは、震災前の街並みを立命館大学が住民に詳細な聞き取りを行い復元したもので、例えば、ここには犬が居たなど、可能な限り情報を取り入れたものであり、震災前の田老の様子が見える展示になっている。

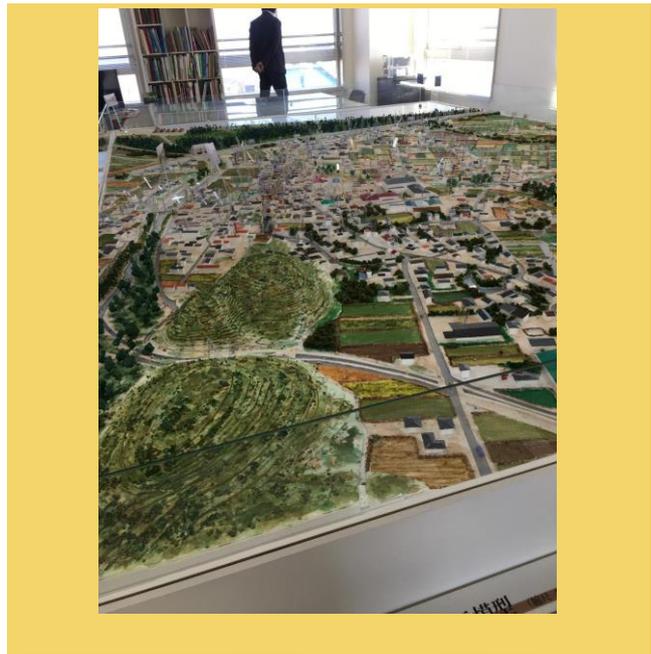
・津波遺構たろう観光ホテル / 田老防潮堤



津波遺構 たろう観光ホテルや田老防潮堤 は、たろう清里ステーション（道の駅）に隣接した遺構であり、津波の破壊力を感じさせる圧倒的な施設であった。また、防潮堤のスケール感も相まって視覚的に来場者に避難や防災についての必要性を訴える施設であった。

津波遺構 たろう観光ホテルは、圧倒的存在感であった。

野田村復興展示室 / 野田村道の駅（防災コーナー）



野田村復興展示室は役場周辺に位置し、一階が保健センター、三階の一角が展示スペースとなっている。

村内のジオラマに加えて、震災関連図書やパネルが展示されていた。

また、野田村道の駅には、展示パネルが整備され、震災時の被害や復興に向けた動きが展示されていた。

尚、津波によって4.7mまで浸水したものの復旧を行った施設であり、当市の防災学習館と類似している。



●この野田村復興展示室までが初日の行程でありホテルで反省会及び意見交換を行った。

主な意見は、次のとおり。

- ・施設を集約させており、中心街に津波伝承施設が多い
- ・うのすまいの簡素なつくりの施設には驚いた
- ・震災発生時から数日間の動きや避難の様子を伝える展示が多く、仮設住宅や災害公営住宅などを伝える展示は少ない
- ・どの施設でもスタッフが笑顔で丁寧に対応され感心した
- ・各自治体により特色はあるものの、展示内容は類似がちなので工夫が必要
- ・陸前高田市のパフレットはあるが当市のものは置いていない
- ・被災した物の展示はあまりなかった
- ・気軽に寄ることが出来る施設と予め施設の位置を知らなければならない施設に分かれる
- ・一目で何の施設かわかるものは少ない

・情報交流センターYOMUNOSU



久慈駅に隣接した交流施設。一階は交流スペース、2階3階は図書館となっている。お話しを伺ったところ、図書館は民間委託。本の配置は利用者の目線が考えられており、当市も見習うべきと感じた。一階はNHKの連続ドラマに関する展示やアニメに関するものが多数並べられ、来場者を楽しませてくれる。配置、色、明るさ、デザイン性が高く、玄関口としての機能を果たしていた。また、駅近くには子育て支援センターがあり、立地が良く利用しやすい環境を目指しているのがわかる。

山田町まちなか交流センター



山田駅周辺に位置し商業施設内に存在する。当市に置き換えると、大船渡町内のマイヤショッピングセンター敷地内に施設があるイメージであり、立地が素晴らしく気軽に学べる施設を目指しているのが分かる。運営は年度協定による民間委託であり、今回視察した伝承施設では最もコンパクトな施設であった。どちらかと言えば、交流センターがメインなのかもしれない。展示は、パネルの他、被災を受けた道路標識等が中央部に配置されていた。モニター映像の内容は6種類で各20分程度にまとめられ震災当時の体験談が多い。

● 大槌町文化交流センター（おしゃうち）

- ・ 1, 2 階は交流スペースと多目的ホール、津波伝承施設。3 階は図書館が併設されている。
- ・ 魅せる木組みによる木造建築の温もりに加え、午後 10 まで開館しているのが特徴的。
- ・ 当市の防災学習館のパフレットを見つけることができた。



大槌町文化交流センターは、多目的ホールや交流スペースの他、2 階に津波伝承施設がある。震災発災時の様子や教訓のパネル展示の他、大スクリーンによる津波の映像はこの地に何か起こったかを瞬時に知らせることが出来ている。また、教訓も明確であった。この施設は駅から徒歩 6 分であるもののコンビニや商店が隣接され、平日にもかかわらず市民が訪れていた。

考察

施設の立地

- 今回、3.11 伝承ロードに掲載されている岩手県内の第三分類施設を当市の施設と比較するために視察を行った。施設は基本的に駅周辺に位置するものが多く、伝承施設単独で存在する施設はなかった。
- 施設の多くは中心部や行政施設、又は商業施設に隣接しているものが多く、相乗効果による賑わいを期待しているものと考えられる。
- 当市の防災学習館は、実質単独施設であり、中心部に位置しないことが課題。

施設名	立地	備考
いのちをつなぐ未来館/祈りのパーク	三陸鉄道リアス線下車 1 分	震災後整備・複合施設
宮古市市民交流センター防災プラザ	宮古駅直通	震災後整備・複合施設
たろう清里ステーション	道の駅敷地内	震災後整備・複合施設
野田村復興展示室	道の駅野田から車で約 5 分	復旧整備・複合施設
山田町まちなか交流センター	三陸鉄道リアス線から徒歩 3 分程度	震災後整備・複合施設
大槌町文化交流センター	三陸鉄道リアス線から徒歩 6 分程度	震災後整備・複合施設
おおふなポート	JR 大船渡駅直結	震災後整備・複合施設
大船渡防災学習館	三陸鉄道リアス線から徒歩 10 分程度	復旧整備・単独施設

施設整備内容

- いのちをつなぐ未来館は、釜石祈りのパーク、鶴の郷交流館、市民体育館、釜石復興スタジアムに併設されていることから、多様な目的での来場が可能なエリアとなっている。各施設もコストを意識した建築施設が多く、当市でも大いに見習うべきと考える。
- 宮古市市民交流センター・防災プラザは、中心市街地に位置し、市役所施設内に併設されるなど、市民や観光客にとっても利用しやすい環境であった。また、将来的な津波伝承施設のあり方として参考になると考える。

展示内容

- いずれの施設の展示も素晴らしいが、当市と大きく異なるのは常設展示ということである。当会派として、改めて他自治体との整備や復興交付金の使い方について協議したい。
- いのちをつなぐ未来館の展示はクオリティが高く、東日本大震災の出来事、教訓、防災学習の取組など、周辺施設と相まって臨場感もあり分かりやすい。この施設を目的に訪れる価値は高いと感じた。

- 展示内容が引き締まっていたのは、宮古市市民交流センターであり、大槌町文化交流センターの展示方法については、おおふなポートでも参考にすべきと考える。
- たろう清里ステーションは、重点道の駅内にあり、「学ぶ防災」と記したのぼりも立てられ、どのような施設なのか一目で分かりやすい。基本的にどの施設も外観から施設目的が分かりにくいことから、当市でも工夫を行う必要がある。
- 展示内容は、過去の津波被害の歴史に加え、東日本大震災における被害状況が多い。パネル展示と映像が主であり、東日本大震災津波発生時間に偏っているように感じた。また、避難場所に関する情報は多かったものの避難した後の行動や避難所で困ったこと、仮設住宅での暮らしや復興に係る課題はあまり見られなかった。
- パネルと画面による映像が多いが、被災した現物の展示はあまりなかった。
- 津波遺構たろう観光ホテルは、その瞬間に何があったのか視覚的に理解でき、予約ではあるがその施設で映像を見るという疑似体験もあることから、圧倒的存在感であった。

おわりに

今回の 3.11 伝承ロードの視察では、多くのことを学び、肌で感じることができた。

被災自治体は、それぞれ懸命のご努力で復興を進め、その取組は現在も続いている。1000 年に一度と言われる東日本大震災津波を後世に伝えることは、いまを生きる我々の責務であると考えますが、その伝承の難しさを同時に感じた視察でもあった。

具体的には、復興が進むにつれてまちや暮らしが新しくなり、当市も同様であるが被災した建物はほぼ見当たらない。そのような状況下において、津波の恐ろしさや破壊力を後世に伝えることは容易でないと考えられる。

つまり、今回の伝承ロードの施設の多くは、震災後に建てられたものであり、展示物やパネルも震災後に作成されたものである。パネルは平面の二次元であり、伝えられる情報に限界がある。

したがって、瞬時に何が起こったかが理解できる視覚的に可能な施設は今後益々貴重な存在となり、陸前高田市にある県のいわてつなみメモリアル、遺構たろう観光ホテルは伝承ロードを支える意味でも特に重要な施設となっていると感じる。

さて、今回視察を行った各伝承施設の立地について述べてみる。

各施設のアクセスは悪くない。中心部に位置し、駅に隣接し、電車や車、路線バス、徒歩でのアクセスが考えられている。また、複合施設が多く、津波伝承施設に来場者が訪れる工夫、又は、来場者が伝承施設に訪れやすい工夫がされていると感じた。

当市のおおふなポートは、他自治体と比較しても立地は劣らない。しかし、分散型の当市の防災学習ネットワーク施設の博物館や防災学習館、魚市場等は他自治体の集中型の施設整備と異なりアクセスが弱く、補う何かが必要となっている。

つまり、多くの自治体の津波伝承施設は一か所で見学・学習できるようにしているのである。（多くても伝承施設と追悼施設間の移動で完結する/第三分類施設）

一方、本市の場合は、第三分類施設に加え、第二分類施設が多く存在し、今後も増加する方向と伺っている。

他自治体では石碑が多いものの、本市では屋外時計などの直接被害を受けたものから、津波警報塔、夢海公園まで多種多様に存在している。（津波被害を受けたもの、津波被害を防ぐものの混在が特徴）このことは、移動がともなうことを意味し、本市の防災学習ネットワークは、「移動が前提」となることが課題であり、工夫が必要となって来る。

加えて、本市の津波伝承施設や津波遺構を見学するには、多くの時間を要することから、各施設への順路や時間表示が必要となってくると考える。

その役割を担うのがおおふなポートであり、防災学習のゲートウェイ機能を発揮しなければならない。

つまり、市内に点在する施設の情報を的確に、周遊を目的とする方に伝えなければならない。現状で充実しているかどうかは意見の分かれるところであり、少なくとも他自治体の伝承施設と異なり常設展示がないということでは、ゲートウェイ機能としては弱いと言わざるを得ない。加えて、他自治体のように一か所で完結しないとすると、来場者数や展示物も分散することになり、相乗効果への期待は弱くなる。さらに、各施設の役割分担の明確化が必要であるが、現在のところそのようには感じない。

したがって、ゲートウェイ機能の充実に向け、先に述べた第二、第三分類施設への誘導機能の強化、具体的には、大槌文化交流センターのようにスクリーンによる短時間な東日本大震災津波の被災状況等の説明に加え、おおふなポートを起点帰着とした各施設の説明と誘導インセンティブが効果的と考える。

さらに、誰に向けての施設かという目線で考える必要がある。

県内の各施設を見た限りでは、市民県民なのか観光客なのかとの区別はなく、勿論、世代の区別もない。例えば、本市の防災学習館を例にとってみると、誰が学習する施設なのか、つまり、生徒が対象なのか、それとも市外の東日本大震災津波を経験したことのない方なのか明瞭ではない。今後、時間の経過とともに今一度整理する必要があると考える。同じように各自治体の伝承施設では、津波被害を伝えたいのか、避難方法を伝えたいのか、教訓を伝えたいのかが分りにくかったと感じている。そのような中で、いのちをつなぐ未来館は、視察した施設では唯一展示方法の工夫により多くの世代が学ぶことが出来る施設と感じた。

一方、各伝承施設は、外見から何の施設なのか分からないことも多く、各自治体による位置付けや現状が暗示されているように思えてしまった。

さらに今後は、津波伝承施設を目的に来場する方がどれだけいるのかも見極めが必要となってくる時が訪れると感じている。

勿論、我々の世代の風化防止に関する努力次第かもしれないが、振り返ってみるとチリ地震や昭和8年の津波に関する展示はどれだけ注目され、そして維持されていただろうか。津波石も行方不明になっていたものが東日本大震災津波によって発見された塩梅である。

当分は、津波伝承施設の充実を図りつつ、時間の経過を見据えながら施設規模や展示場所、展示内容の集約が必要になると時期を迎えると考えます。実際、我々が伺った施設では我々以外の来場者もなく、照明がついていない施設も存在したのである。今後、新型コロナウイルス感染症による外出規制の反動により一時的に来館者数が伸びることはあっても、将来的に来館者数の過度な期待は難しいだろう。

そのような中で、宮古市市民交流センター内の防災プラザは一つの答えだったように感じた。市役所庁舎内には様々な施設やサービスが集約され、その一角に防災プラザとして防災学習と伝承の役割を担っていた。

いずれ、視察を通じ感じたことは、当市の津波伝承ネットワークは分散型により、市全体をひとつの施設と考えることが必要であり、施設が多いために順路や経路の誘導方法と役割分担の明確化が必要である。このような意味において、差別化が図られているとも考えることが可能であり、方法によっては県内随一の津波伝承地域となることも可能であると認識した次第である。

以上、今後の更なる期待を込めて視察報告としたい。



車窓から山田町内の防潮堤アート眺めることが出来た。

当会派では既に平成25年から津波を経験しない世代に向けて、防潮堤を活用した景観策について要望を続けている。

当市には、7.5キロのキャンパスが存在しているのである。

